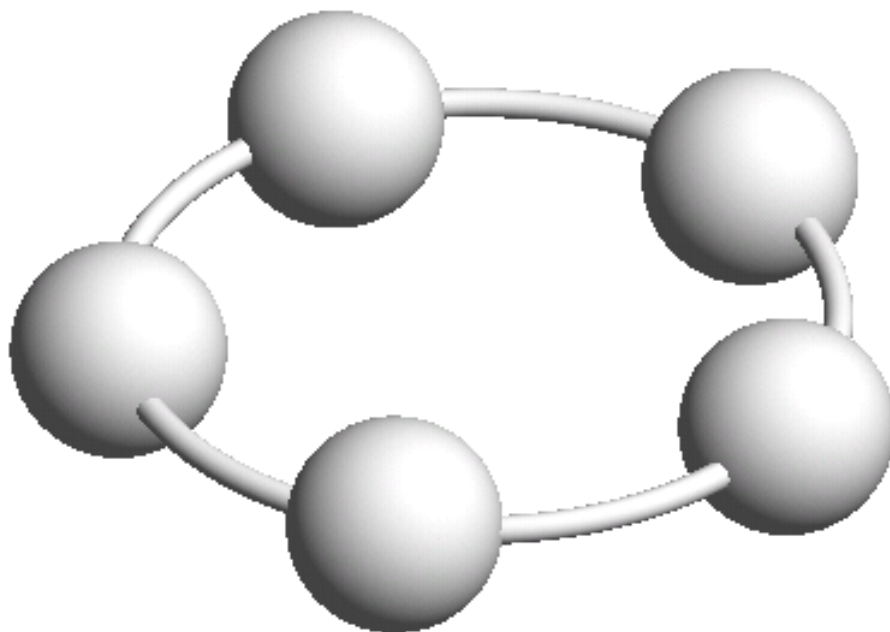


居場所交流

全国フォーラム2003

- for Youth Alliance -

事業報告書



目次 CONTENTS

はじめに	1
プログラム・参加者一覧	2
標準とちがうことはマイナスか？	4
ラベリングに苦しむ子どもたち	6
医療・心理の専門家が持つ権力性	8
子どもの世界	10
プログラムを大人が用意すること	12
ついやってしまったこと	14
居場所スタッフの「専門性」	16
自分の存在に根ざした「鍛えられた主観」	18
居場所のひろがり	20
子育て支援施策と行政がつくる「居場所」	22
居場所の出口	24
居場所はどこへ行く？	26
トークライブ	28
分科会・キーワード一覧	32
参加者アンケート	34
実行委員会の取組み・共催団体紹介	35

はじめに

このフォーラムは「子ども・若者の居場所」で実際に仕事をしている代表者や責任者、或いは活動の中核を担っている方を対象として、相互学びあいと経験の共有を目的として開かれました。それは、難しい状況におかれた子ども・若者が多い社会的な状況のなかで、「居場所」というテーマに関して、子ども・若者と共に、大人（スタッフ・職員）が何をすべきか、すべきでないか。過去と現在の様々な実践と試行錯誤の中から何を学び、どんなことを考えればよいのかという点について立場や所属や肩書きを忘れて、集い、語り、悩み、実践し、それをまた共有するシクミと機会が必要ではないかという考えから生まれたものです。おりしも、子ども・若者の「居場所」の必要性が唱えられる一方で、建物やスペース等のハード面だけでなく「どんなまなざしを持った人がその場にいるのか」というソフト面や「人」にも着目して欲しいという願いもあります。

結果的に、お集まり頂いた方の多様な経験や視点のなかから、子ども・若者の現状とその子ども達とかわりをもつスタッフ・職員に何が求められているのかについて、浮かび上がってきたことがありました。また、どの活動も「行かなくてはいけない」という強制力が無いのにも関わらず、集まってくる子ども・若者がいる理由が、参加いただいた方々の考え方や心意気を聞くうちにわかったような気がしました。

詳しくは本文をご覧になって頂ければと思いますが、当日はとても内容の濃いものになり、参加者の皆さんからは総じて高い評価を頂くことができました。2004年もこのフォーラムを実施する予定でいますので、ご関心のおありの方は是非ご参加ください。

最後になりましたが、長期にわたりこの企画を有意義にそしてより広くの方に参加をいただける様にご尽力頂きました実行委員会の皆様と、ボランティアの皆様、そしてお忙しい中全国よりお集まり頂いた参加者のお一人お一人に厚く御礼申し上げます。また、この貴重な機会はルーセント・テクノロジー財団の助成によって実現することができました。重ねて御礼申し上げます。

2004年1月15日

特定非営利活動法人 青少年育成支援フォーラム
国内事業統括 鈴木祐司

居場所交流全国フォーラム2003プログラム

【日時】 2003年9月20日(土)～21日(日)

【場所】 上郷・森の家 (神奈川県横浜市)

9月20日(土)

9:30～10:00 受付

10:00～10:30 開会挨拶、プログラム説明

10:30～12:30 参加者による団体活動紹介

14:00～17:30 参加者自己紹介、分科会テーマ分け

19:00～21:00 分科会

9月21日(日)

9:30～10:00 オリエンテーション

10:00～12:30 分科会

14:00～16:00 分科会報告、まとめ

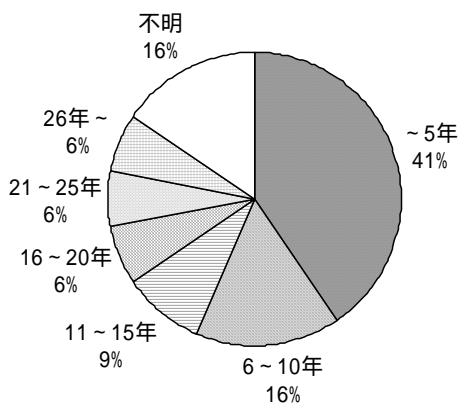
16:00～16:30 閉会

参加者データ

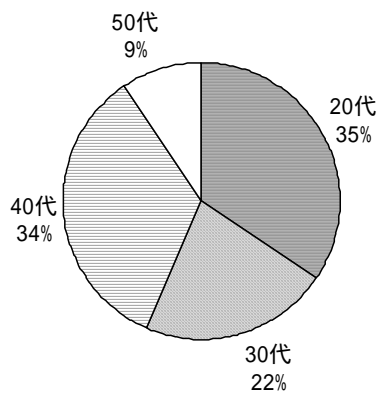
参加者 32名 (実行委員5名、事務局2名を含む)

参加団体 24団体

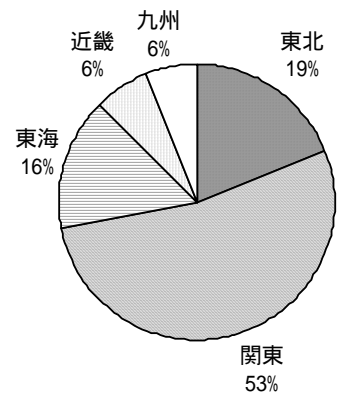
経験年数



年齢



活動地域



「標準・普通」と違うことはマイナスか？

多様な育ち・学びへ

多様な自立のイメージ

「自立しなくては」という時のイメージが一人で立つことだという考えは、若者にとっても多く見られます。「では、一人で立つとはどういうこと？」と問うと、「何でも一人でやること」と答えるのです。

今はそのような状況が加速、増強されてきているなかで、子どもたちが苦しくなっている部分があるように思います。しかし、誰も一人だけではたっていけないわけで、「何でも一人でやること」を重視する必要はないのではないかと。様々な人とつながりながら、頼り頼られながらかわりあって生きていければそれでよいのではないかと、という意見がありました。

ある居場所に来ているインド人のボランティアも、「何で日本人は一人ひとりが自立しようとするのか？」と言っていたそうです。イスラムの世界は大家族制

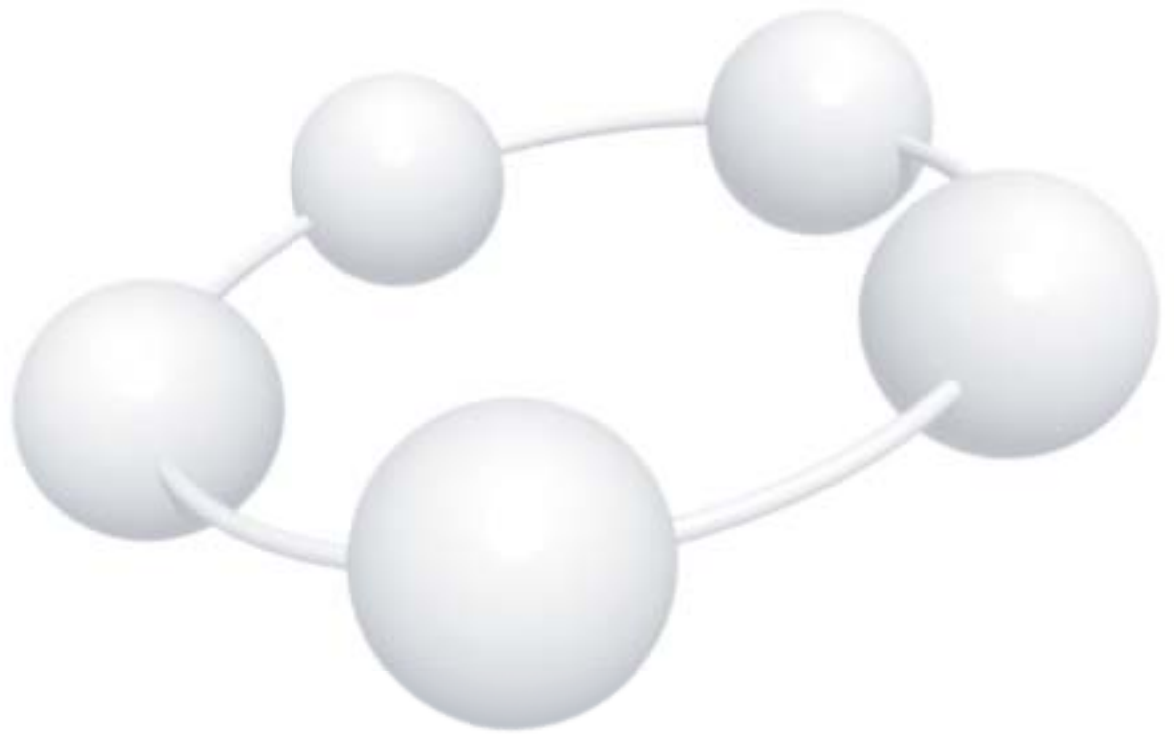
で、家族同士がつながっていて、家族として何とかやっていくことが非常に大事なのだという話をしていました。

また、「自立というのはどういうことか、大人たちが子どもに伝えていくことが大切なのではないか」という意見もあります。つまり、大人が生きていくことをどういうふうにするかが非常に重要で、大人が自らも一生懸命生きていくなかで、それが子どもたちにも伝わっていく、さらにその事が場へと広がっていくのではないのでしょうか。

クリエイティブに生きるということを含言葉とする考え方もあります。それは人との関係を見出す、つくりだすということです。人間は何かを生み出す動物で、それは関係性でもそうでしょう。

あるところでは廃材を使って家を建てたり、畑を作ったりして、そこに子どもたちが来ています。最近ではパン窯を自分たちでつくって自然酵母でパンをつ





くって食べて、おいしいねと言って、今度は販売をしてみようかと話しができたそうです。

クリエイティブに生きることでそこからパワーが生まれ、そのパワーが次へ次へとつながっていきます。そして、様々な子どもから、多様なアイデアがでてきます。

他者との違いを受け入れ、楽しみつつ、自分自身のありかたも受け入れていける、子どもたちにはそういうものを伝えていけたらいいという意見がありました。

「標準・普通」と違うことはマイナスか？

「標準・普通」から違っていることを

マイナスだとする見方を変えていく必要があると思います。

その一つとして「不登校」があげられました。

文部科学省は90年代の初めに「誰にでも起こる不登校」と言うようになったのに、「学校復帰」を重視する動きへと揺り戻しが起きてきたのは、結構深刻だと思います。

子どもの成長は、唯一学校教育しかないという価値観があることで、行かないことが異常であるかのように扱われています。そこに医療がかかわってくるという構図があるように思われます。そこを変えていかないと、学校に行かない、行けない子ども達は少数派として異常だということに押し戻されてしまいます。

ラベリングに苦しむ子どもたち

ラベリングされ 専門家の対象領域に 入れられてしまう子どもたち

子どもたちがいろんな病名をつけられたり、専門家が発言することによって、親や居場所のスタッフなどが動きにくくなったり、本人がその病名に縛られてしまうということが非常に増えています。医療機関やカウンセリングルーム等、専門家の領域の中で診断を下された後に居場所やフリースクールに来る子どもたちがこの数年急に増えてきているという報告もあります。

「不登校」という診断名で 薬が処方される

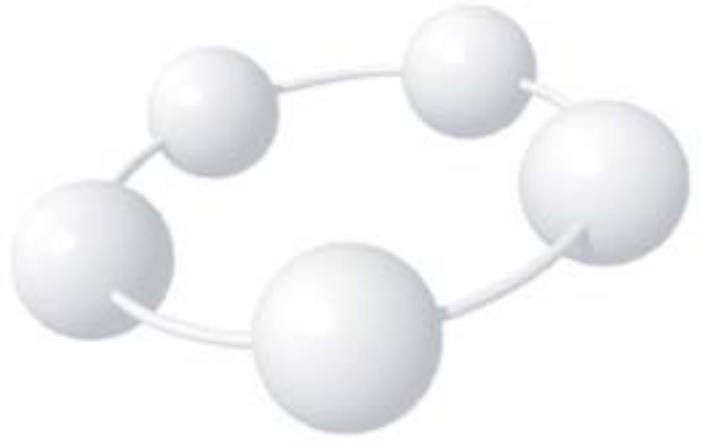
居場所に通う子どもと親にアンケートを実施したところ、医師から「不登校」という診断名を受け、抗精神剤などの薬を飲んでいる子がいるという発言があり

ました。報告では、副作用が結構あること、「病名」に対して不安を持ったり、それが辛いといっている子どもたちがいることがわかりました。

専門家の介入が 親子の相互理解に壁をつくる

親が医師の出した薬をそのまま飲ませようとする背景には、専門家に対する「信頼」があります。

医師やカウンセラーなど、いわゆる専門家が「あなたのお子さんはこういう病気ですから、こういう薬をちゃんと飲んでください」といわれると、子どもも親も「ああ病気なんだ」という整理になってしまいます。しかし、その「病気なんだ」という気持ちが、ある場面では親が子どもの「今」を分かるう、理解しようとする意識をそいでしまう結果になることもあります。医師が病名を告げ、薬を処方した途端に「この子は病気だから辛いのだ。病気のせいだったのだ」と納得し



てしまうとそれ以上「なぜそれが起きたか？」と子どもを理解しようとしなくなり、そのことで子どもが苦しくなるという状況が意外に多くみられるとか。

本来であれば、親が自らの子どもが今どういう状況なのか、なぜ今子どもが辛いのかを知ろうとすれば、いろんなことが見えてくる可能性があります。

子ども自身も親にわかって欲しい、助けて欲しいという気持ちがあり、その思いを分断してしまうことにつながりかねません。そういう子どもとどう付き合うかも考える必要があるとのこと。

ラベルを外す難しさ

子ども自身が病名や診断名を付けられることで、傷付く場合もあります。病名をつけられた子の中には自分を劣った存在だと考え、ほかの子どもに自分の病名を知られたくないと思うことがあります。

昼夜逆転の生活をしていた子どもが、有名な医師に「ふくろう症」と名付けら

れ、薬を飲んでいました。「居場所」に来てしばらくすると、薬を飲まなくても大丈夫になり、最終的には薬を飲まなくなりました。本人は、最初は薬を飲まなければ不安になっていたといいます。しかし、本当は飲まなくても何とかなるとわかってきて、そのことで飲むことに違和感を感じはじめ、飲むのをやめたそうです。そして飲まなくなったら、むしろ体調が良くなったといいます。そのことを彼が盛んに話すのを聞いて、他の子たちも気持ちが楽になってきているという例も報告されました。

専門家によって貼られたラベルを外すためには、どのようにすればよいのでしょうか。例えば、信頼できる精神科医の意見、いわばセカンドオピニオンによってラベルを外すということが必要であり、有効なことがあるという意見がありました。しかし、専門家のラベルを外すために、また別の専門家の権威に頼らなければならないという状況は、難しさもあるという声が聞かれました。

医療・心理の専門家が持つ権力性

「医療モデル」に対する 「生活モデル」からの問い返し

例えば、風邪を引いた人に対して、その病気のもととなる原因に対して薬を用いて「治療」しようとする「医療モデル」と、生活（くらし）の中にある力で子どもたちを元気にしていこうとする「生活モデル」があり、その部分で議論になっているという意見がありました。

現代では、単に病原菌が感染症を引き起こしているという場合だけでなく、生活上の様々な要因が症状を作り出している場合があります。それを感染症と同じような考え方で原因を特定し、薬でそれを抑えていこうとするやり方に対する異論があるとのこと。1960年代、70年代に始まったピアカウンセリングやサポートは、そういう専門性に対する「捉えなおし」からきているそうです。

医療に答えを求める親の動き

子どもが心の変化で体調などに変化が生じた時、その子に何か原因があるのではないかと考え、その原因を知るために病院に連れて行く親が多いように思います。それは、生活の場や教育で子どもを元気にすることに対する親の負担が大きく、もうお手上げの状態になっているこ

とも要因の一つとして挙げられるでしょう。そういう人たちが医療に救いを求めてどっと動き出しています。医療モデルと生活モデルでいうと、親が医療モデルを求めていかざるを得ない状況にあるのだと思います。

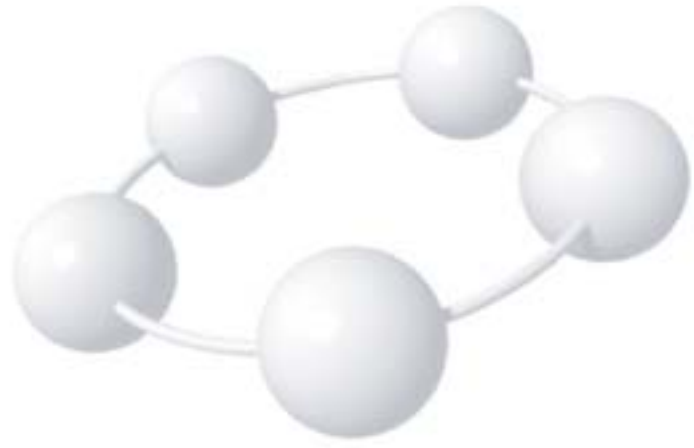
親が自分の子育てが間違っているのではないかと思った時に「医療モデル」で障害や病気だと診断されれば、自分のせいではなかったと思えます。親にとっては、医療モデルの中に落とさないと自分が責めを負わなくちゃいけない、というような夫婦関係や社会や世間の目があるのではないかという意見がありました。

薬の濫用

- 薬を飲むのは誰のため？

Ｌなどの場合、実際には薬を飲まされている子は結構多いようです。例えば、リタリンという薬は注意欠陥多動障害（ADHD）と言われる子どもに処方されることが多いのですが、学校に行っている時だけ飲まされているケースが多いようです。学校で暴れていると他の子の中で浮いた存在になったり、それが原因でいじめの対象になったりします。それならば薬を飲ませた方がみんなが幸せだ、という論理です。その子が根本的に治っていく、あるいは変わっていくという発想ではなく、対症療法で、暴れたりしない





ために、他の子とうまくやっていくために飲みなさいということだという報告がありました。医療の中で言われる必要性が誰のための必要性なのか、本人にとって本当に役にたつことなのかと疑問をもつケースが増えているという意見もありました。

子ども自身が 納得できる医療を

不登校の子も含め、いわゆる「医療」を必要とする子、明らかに医療と連携をとった方がいいケースがあります。しかし、大切なのはその子がどういう診断名をつけられて、どういう治療を受けて、それをその子自身がどう受け止めていくかなのだという意見がありました。

治療の結果がいいにしろ悪いにせよ、その子が納得しながら医療と付き合い、向かい合っているところをサポートしていくことが、スタッフの役割だとする指摘がありました。本人にわかるかたちで内容を説明したり話し合うことは、「子どもの参画」につながることはないかという意見もありました。診断名を調べ

たり、薬を調べたり、そういうことをしながら、子どもが社会に対する力を身に付けていくことも考えられます。

主体としての子ども・親

- 専門家の言うことを丸呑みにしない -

「医療モデル」「生活モデル」にこだわることなく、専門家がいるなら利用すべきとの意見もあります。その際に大事なことは専門家の言うことを丸のみにしないで、自分の意見や考えをもつことが大事だという指摘がありました。つまり、スタッフがすべきは、そのような視点を伝えると共に、そのプロセスを子どもの側にたって「支える」ことではないかという意見です。

また、専門家といった場合、医師の他にも弁護士などが考えられますが、現状では現場のスタッフの言葉に耳を傾ける専門家は非常に限られているように思います。そのなかで、専門家が変わってくれるのを待っているだけではなく、子どもや親、居場所スタッフの感じている違和感や声を積極的に投げかけていかないといけないとする声がありました。

子どもの世界

始まりの動機が違くと最後まで違う

ある場所では、最近料理をすることが流行っているそうです。

小学校4年生くらいから高校1年生くらいのグループ迄、「今日の料理をやりたから使ってもいい？」なんて聞かれるそうです。「今空いているから3時から6時くらい迄ならいいかな」というと「ありがとー！」と言って、そういう時は何も言わないで最後の片付けまで全部やるそうです。自発的に、ホントに自分たちがやりたいことをやったという時は、後片付けまで完璧にやる。その一方で、スタッフの側がお膳立てしてなにかやろうよっていったときは、片付けになるとバーツとみんな逃げちゃうとか。

やはりスタートが違くと最後まで全然違うようです。

子どもが自己責任を感じられることを大切に

子どもを主役にする事で、自主性が育つケースも見られます。ある時中学校

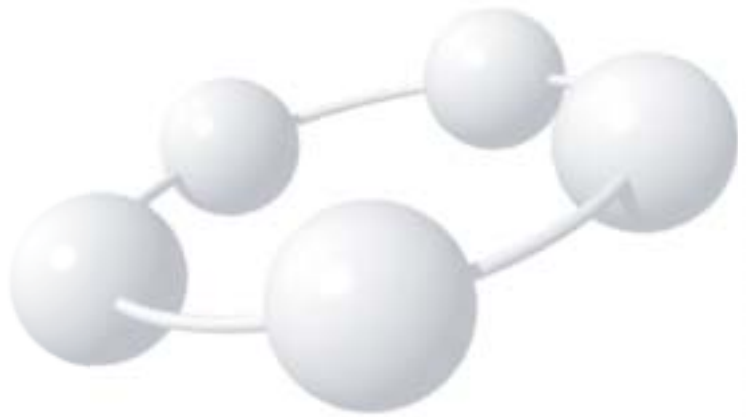
の子どもたちから「バンドをやりたい」という声が出たそうです。しかも、「僕らがなじんだ児童館でやりたい」とのことで、職員は見守ることにしたそうです。すると、それまで余り児童館で目立つ方ではなかった子ども達が、職員に言われるまでもなく自然と近所への配慮として、窓にダンボールを貼って音が漏れないような工夫を施しました。さらにはイベントの広報から、楽器のセッティングや当日の進行、片づけまで全て自分達で行い、つばった子なども含めて約130人が参加した大盛り上がりのイベントになったそうです。

それまでは誰かが困るまで何か行動を起こさなかった子どもたちが、「他人が困るから」と先行きを予測して自分たちの行動を変えようという風になったといえます。

おばあちゃんにまた会いたい！

別な場所では、おばあちゃんたちから「遊びに来てください」と誘われたときに、スタッフ側で子どもたちが関心をもつかどうか不安があったそうです。





しかし、実際はスタッフが考えていた以上に子ども達自身が「また行きたい」「おばあちゃんたちに会いたい」と言うようになりました。

大根やら食べるものが美味しかったというのもあるでしょうし、都市部とは違う自然の空気や、おばあちゃんたちが若いお母さん達と子どもたちを大切に受け入れてくださったのも理由の一つだとか。でもそれだけではなく、やはりそのおばあちゃんたちが子どもたちにとってとても素敵な存在であったのが一番ではないかという報告がありました。この取組みは3年くらい続いているとのことでした。

自分よりも弱い立場の人間を傷つけつつ、自分にも刃をつきつける子ども

ある居場所のスタッフで、足に障がいのある人がいました。ひとりの中学生はそのスタッフに対して「障がい者、障がい者」、「役立たず」とか「お前なんか落ちていい」という言葉を浴びせていま

した。あるとき、その2人が階段で口論となり、スタッフが「障がい者って言うな」と言ったところ、それに腹を立てた子どもがそのスタッフを階段からつき落とすという出来事があったそうです。

その子は自分に自信や自尊心を持っていないようで、実は自傷行為をしていました。自分より弱い立場だと思ったそのスタッフを攻撃することで、何がしかのバランスを保っていたのかもしれない。「役立たず」とか「お前なんか・・・」という言葉はそのまま自分に向けてられてきた「刃」ではないか、だからこそ自傷行為を行うのではないか、ということ意見がありました。

表面的にみて叱ることはたやすいことなのかもしれません。しかし、ある一言一言、一つ一つの行動の裏にどんなことが隠れているとも限らないのが現代の子どもであると言う指摘がありました。

一見無理かなと思うようなことを平気でなしとげたりする勇ましさの一方で、孤独や不安や様々なプレッシャーを胸に秘めているのが「子どもの世界」ではないかと言われました。

プログラムを大人が用意すること

プログラムへの 子どものかかわり方

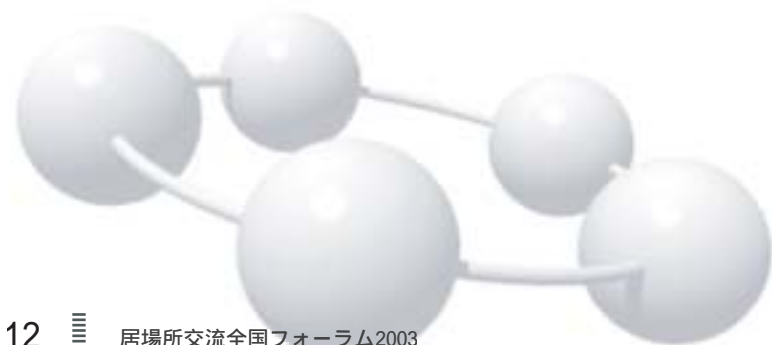
一般的に言えば、大人がイベントの中身や合宿の行き先等を決めるなど「用意」してしまい、子どもはそれに「参加」するだけというプログラムが多いのではないのでしょうか。その一方で、子どもがプログラムの企画段階など、最初からかわる（参画する）ことについて、良い点として子どもが自信をつけたり自己発見をしやすいことが挙げられました。反面、プログラムに積極的にかかわる子とそうでない子にわかれてしまうという課題も挙げられました。

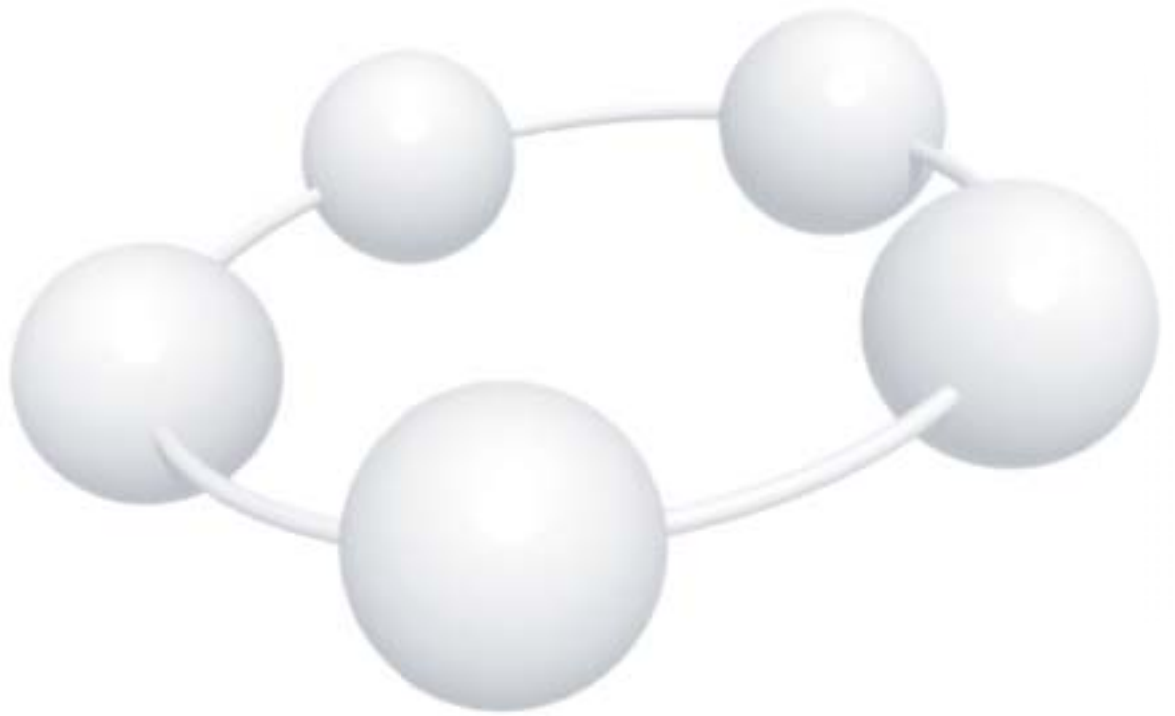
その中で、「必ずしも積極的にかかわらなくてもよい」ということを、スタッフ側は了解しているのですが、子どもたち同士では許し合えないこともあるとの報告がありました。「自分たちは頑張っているのにお前は何でやらないんだ」、というのがやらない子に対してプレッシャーになることがあるようです。

プロセスが大事

それでも大人があれこれ考えるのではなく、子どもが、白いキャンバスに絵を描くのを手助けするのがスタッフの役割とする意見がありました。時間がかかり、あっちにいったりこっちにいったり、様々な葛藤がおこるものの、そのプロセスこそが重要なのではないかという指摘です。また、仮に今は積極的でなくても、いつどのようなことを子どもがやりたくなるかはわかりません。それに、やりたいことが見つかった時に、「これをやりたい」と提案をすることができるのは、普段から大人が子どもとプログラムをつくっていけることがあたり前になっていてこそという意見があります。

子どもも自分がやりたいことができ、一緒にやる仲間をみつけて、エネルギーを出していく。それは、大人が用意した時にはなかなか見られない場面ではという声が聞かれました。





子ども・若者が 自らデザインできる仕組み

居場所の活動や運営の仕方を考える際に、子ども・若者たち自身が変更の提案や意見が言えるような仕組みのある場を作らないと、そこが本当の意味での子どもの居場所にならないというところがあります。子どもや若者が自分達でつくっている、変えていけるという実感（所有感）が必要なのだという意見があります。

子どもが自分たちで考え、話し合い、決めて、実行していくようになっていくことが大切なのです。基本的には子どもたちの自主性に任せる、或いは大人と一緒に考えていくような仕組みになっていることが大切だと言う指摘です。

スタッフはいわば空気のような存在となり、あれこれ考えて上から口をはさむのではなく、子どものやりたいことを実現させる手助けをしたり、困ったときに

相談にのる役割になること。そのように見守ってくれるスタッフがいることで、子ども達や親はもちろん、地域も安心できるはないか、という声が聞かれました。

参加者からは以下のような事例が紹介されました。

公園を居場所にする取り組みがあり、子どもが自主的に動き自分たちで遊ぶ。何をやるのかは子どもが決めるが、大人が常駐していて何かあったらすぐ対応できるようにしているという事例。

国際交流を目的とした中高生のキャンプをやっているが、運営も高校生や大学生が中心になってやっている事例。同世代ということで興味や関心が近く、参加者の若者とも近い目線でプログラムを作るし、友達関係も広がる。やっているスタッフの負担は大きいですが、その分得るものが多い。

ついやってしまったこと

子どもに話した言葉 子どもにとっての態度

単に助言・アドバイスをしたつもりが、子どもを急かす結果になることがあります。こちらとしては良かれと思って言うことが、子どもにとっては急かされたように感じたり、命令調・きつい口調に感じられたりして、結局子どもはそれを行った後にはやってよかったと思うどころか疲れてしまうことがあります。

また、子ども同士の喧嘩の間に入るときは、つい泣き叫んでいる子に関心がいき話をきいてしまうことで、泣いていない相手の子たちを悪者扱いしていると思われることがあります。どうやって聞いたらいいのかについて悩み、子どもたちとのかかわり合いが難しいと感じることがあります。

ネットで知り合った人に 今晩会うと言われて

別の例では出会い系サイトで出会った男の子に今晩会うと言われてたとき、どのように言ってよいのかとても迷ったというケースも出ました。

この場合、どういう文脈の中でその人がスタッフにそれを言ったのかを気をつ

けるべきという意見がありました。

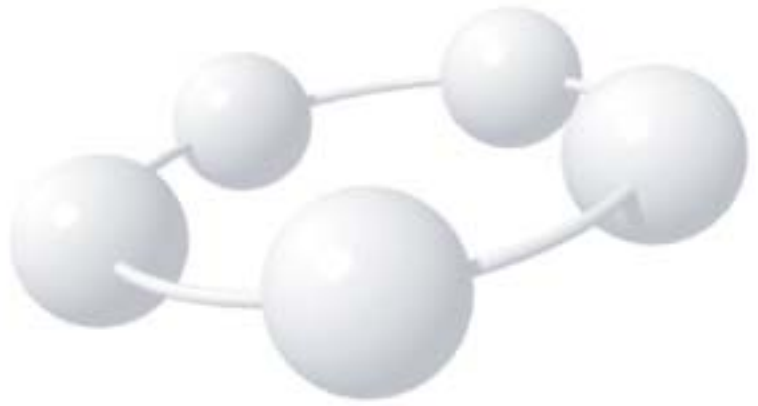
つまりそういう自分を知ってほしい、今とても寂しい、或いは夜家に帰れない等、どんなメッセージを込めて言っているのか。それを誰に、どんなシチュエーションで言っているのか、誰とのどんな関係性のなかで言っているのか、という点です。いずれにしても何かしらの意味があることで、それをきちっと受け止めてあげないとそれは危ないのではないかという指摘がありました。

どんな立場から言うか

もっとも、大人から見て危ないから「止める」と言うことはたやすいのかもかもしれませんが、実際に思い留まるかどうか、或いは信頼関係が崩れることを恐れて、注意するのを躊躇してしまう場合もあるでしょう。

実際に注意した時に関係が損なわれるか・損なわれないかの一つのポイントに、子ども・大人という「上下関係」の中で注意するか、相手も自分も一人の人間なのだという「横の関係」の中で「ちょっとそれはいや」という気持ちを伝えられるかという部分ではないでしょうか。或いは、本気でその子どものことを心配して、気にかけているということが、大人の胸の内にあるだけでなく、しっかりと





子どもに伝わるかどうかも大切なポイントではないかという意見がありました。

子どもが注意を受けてやめるかやめないかということよりも、どういう文脈でその子どもがそのような行動・言動をしているのかを見極めて、子どものメッセージを受け止めることのほうが重要なのではないかという指摘です。

話し合いが相互の成長をうむ

居場所のなかでレイアウトを変える、例えばコタツの位置を動かすというようなことであっても子どもと大人の間で話し合う必要性を感じるという意見もきかれました。

例え悪気が無くても、お互いに関係（影響）があることについては、話し合いの場を設定して意見交換をすることを通じて、子どもは大人の考えていることを「ああ、こういうことを言いたいんだ。そういうことを考えているのか」と分かるようになり、大人の側も子どもたちは「こういうことを感じている、ここに不満を感じるのか」ということが分かり、

心が近づきあえたという感覚を持てることもあります。

皮膚感覚を磨く

一人ひとりの子どもが抱えている「気持ち・間」というのは本当のところはよく分からないのかもしれませんが。

言葉で話し合うことが出来れば、それはそれでよいことですが、子どもとかわる大人は何となく気配で危ないな、変だなと感じたりちょっと良くなったなというアンテナ・嗅覚のようなものを持っていないといけないという意見がありました。「理屈」ではなくて「勘」というのが当たっている時もあります。勘や感覚という部分を研ぎ澄ましていくことも忘れてはいけないのかもしれませんが。

また、言葉でコミュニケーションを取ろうとしてくる大人は信用せずに、一緒に思いっきり遊んだことを通じてスタッフを信頼するようになったという子どもの意見も紹介されました。子どもとの関係性を、表面的な言葉の使い方などのわかりやすい部分だけで捉えないように注意が必要なのかもしれません。

居場所スタッフの「専門性」

子どもと向きあうことに 一生懸命

居場所のスタッフの多くは、子どもと向かい合うことを一生懸命やり、そこからいろいろ伝わってくるを感じとっていきます。

子どももスタッフもそれぞれ相性があり、子どもと向き合い、それぞれの関係の中で気付いていくということがあるとの声が聞かれました。伝統技能のように体で覚えなさいというのとも少し違うのかもしれませんが、子どもと向かい合うことで理解できる部分は多いとの意見でした。

また、実際に子どもに接してみても一生懸命理解しようとしても分からなければ、いろいろな人の話を聞いたり、勉強もする。ただ、はじめに座学ありきではなく、むしろ状況に応じて学んでいく気持ちが必要との声がありました。

自分の問題に気づく

スタッフがどういう専門性を身につけるべきかという議論で、一番大事なのは自分の問題に気付くことだという意見がありました。相手がどういうことを出し

た時に、自分が怒りを感じたり、どきどきしたりするのか、そうした自分の問題に気付くことに対する研修には力を入れるべきとのことでした。つまり、リストカットをした子どもに対して、どきどきしたり泣いたり騒いだりするスタッフだと、その子はそのスタッフを独占したいときはまたリストカットをする可能性があり、スタッフの対応によって相手の問題を誘発することもあるとの指摘です。

スタッフの専門性は、自分の問題、或いはそこにかかわっている私は一体何者なのか、というところにあるのだという考え方です。

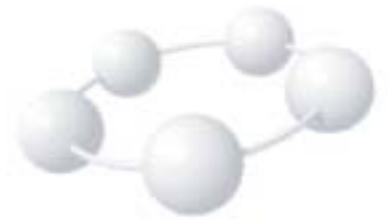
「力関係」に 敏感でないといけない

スタッフは、専門家と子どもの力関係、スタッフと子どもの力関係など、いろいろな意味で力関係に敏感でないといけない、という意見がありました。敏感であれば「引き際」を察知できるし、状況によってはこちらが負けなければならない場面も出てくるのが理解できます。

具体的な日常の中での関係性の組み立て等にも、力関係を意識するかどうかはとても大事なポイントであるとの指摘がありました。

そのように考えると、専門家や大人と





いう社会的、身体的にも力をもった相手に対して、想像以上に子どもは言いたいことを言えていないのだと考えることが必要ではないかという意見がありました。

子どもにつけ入るスキをのこしておく

大人のだらしなさが見えた方が、子どもたちにとっては付け入る余地が出ることもあります。動揺している姿も見せて初めて、「しょうがないやつだな」と付き合い合えるようになります。なるべく賢くなさそうに見えた方がいい場合もあるとの声が聞かれました。

居場所の中には、「正しいことは遠慮がちに言おう」というところもあります。正しいことがものすごく強く使われているため、大人（スタッフ）が強く言ってしまうと、絶対に相手（子ども・若者）は反論できない状況を作り出してしまうため、という指摘がありました。

客体化せずにかかわる 飲み込まれることも含めて 支え支えられる

医学や心理学は子どもたちを客体化して、そこに自己を関わらせませんが、スタッフは子どもと同じ高さでかかわっていく。そこがとても違う点だといえます。

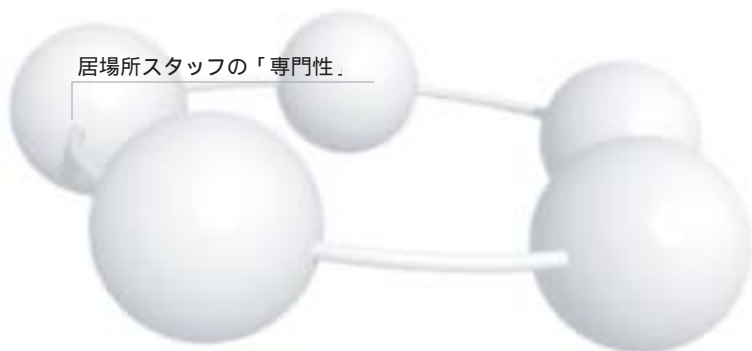
子どもとスタッフとの関係は、その場で状況を感じつつ動いていく。明らかにスタッフが飲み込まれている状況を目にする時があっても、その時は危うくてもしっかりとかわることで、何かしら違う力が生まれてくるとの意見がありました。

だから、たとえスタッフが飲み込まれたとしても、結果的に居場所ではそのことによって生まれる何かを肯定しているということです。もしかしたら、飲み込まれることも含めて、子どもとスタッフの間で支え支えられるということがあのでは、という意見がありました。

かかわりへの危うさを 感じながらも、相手に 踏み込むスタッフの覚悟

時として、スタッフが子どもたちの「逸脱」に寄り添う必要性が生じる場面もあります。相手に入り込みすぎている自分に危ないなという意識を持ちながらも、踏み込んで子どもと付き合うことがあります。

例えば、「ここを突破しないとこの子は本当に人を信じないんじゃないか」と思う時は、「危ないな」という意識を持ち、その自分の危うさをどこかで冷静に計ろうと思いつつ、あるいは周りに伝えておきながら、入り込んでいく時があるとの声が聞こえました。



若いボランティア・ スタッフの役割

若いボランティアやスタッフの中には、酒もタバコも付き合って夜通し麻雀したり、色々なところをフラフラして徹夜明けで帰ってくるスタッフもいるとのこと。奨励はしていないけれど、片目をつぶっているという報告がありました。

思春期の子どもは、そういうことを通じてつながっていく時があり、それが育ち合うということにつながるから、という意見です。これは立場や責任を背負っていて、分別が要求される代表者レベルのスタッフでは、やりたくてもなかなかできない事です。たとえやったとしても、子どもたちの側から「お前は違うだろう」と言われることにもなりかねません。逸脱にも付き合えるスタッフがやはり必要だと言われました。

人が人を信じて生きていくエネルギーは、正しいとか正しくないとかを超えた時に、「こいつ好きだ」とか、「かわいい」と感じるような時につながりあって、力をもらう部分もあるとのこと。

一人で背負い込まない

ただ、このように子どもと深くかかわりあうことが、ある側面においてスタッフや子ども、そして居場所（組織）としての危うさと紙一重であることを意識すべきとの声もありました。

但し、より重要なことは、その危うさをマイナスにのみ捉えて踏みとどまるのではなく、どのようにすれば回避できるかを考えていくことの重要性が言われました。例えば、スタッフそれぞれの視点で子ども一人ひとりを見つめ、感じたことを共有して話し合っていく。様々な状況や起きたことなどを相互に報告してスタッフ間で意思の疎通や対応などについて話し合うことの重要性が言われました。つまり、ある局面においては子どもとスタッフが1対1でがっちり向き合うものの、スタッフ同士連携をはかり、点から線そして面で一人ひとりの子どもを支え、スタッフ同士が支えあっていく体制こそ、息の長い活動には不可欠なものとの考え方です。

自分の存在に根ざした 「鍛えられた主観」

駒澤大学 講師 萩原 建次郎

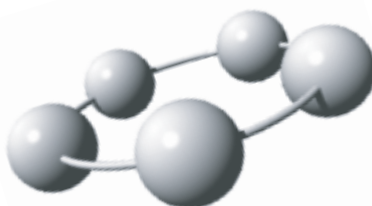
居場所スタッフの専門性を考えたとき、医療モデルを背後で支える人間観と生活モデルを支える人間観の違いを見極める必要があると思います。医療モデルを支えるのは客観科学であって、そこでは「客観性」という名の下で人間をモノと見なし、物質レベルに還元して数値化していく力を強力に働かせています。とくに医学や発達科学では、人間の能力の解明のみに焦点づけられ、人間の多様性や奥行きは捨象されています。こうした人間観が医療・教育・心理学などを通じて生活に深く浸透すればするほど、子どもたちの多様な人間的側面は「能力の束」に還元されていきます。これを「科学的人間観」と名付けるならば、実はもともと暮らしに生きる人間世界のごく一部を切り取ったに過ぎないことが見えてきます。

それに対して暮らしにおいては感情と主観が交錯し、他者との多様な関わりが展開されています。そのなかで居場所スタッフは、医療モデルのような限定的で一方的な関係ではなく、子どもと共に多様に織りなす関係世界を生きるわけです。スタッフは科学的な知識とも対話しつつも、暮らしに根ざした経験や全身をセン

サーにして子どもをとらえています。ベテランスタッフ同士の議論で、子どもとの関係に生きつつ、関係に巻き込まれながらそれを冷静に見つめる「自分」を鍛えることが話題となりました。

ここでは、かかわる子どもへの見方・感じ方と同時に「自分」の存在意味も吟味されるわけです。つまり関係に生きる以上、見ている・感じている自分の主観を排除せずに、むしろ検討の対象にするわけです。このことは子どもへの見方・感じ方・関わり方への変貌にも連なります。こうした吟味によって練られた主観は、個人的な感情に支配された主観とは質の異なるものです。臨床心理の枠を超えて思索を展開した

E. H. エリクソンという人は、これを「鍛えられた主観 (disciplined subjectivity)」と名付けています。鍛えられた主観によって見える生きた人間の姿は、医療モデルの科学的人間観とは区別して、「存在論的人間観」という言葉で仮止めしてみたらどうでしょうか。その内実は、一定の法則や解答で埋められるのではなく、絶えず発見と創造によって充実され、生きた人間の姿を深めていく営みになると思います。



居場所のひろがり

居場所の広がり

居場所を必要とする子どもたちに対しては、「居場所は色々なスタイルがあるんだよ。その中で君はどんなところがいいんだい？」ということを伝えられたらいい、だから居場所はかくあるべきだ、と提唱するのは難しいのではないかと思われます。

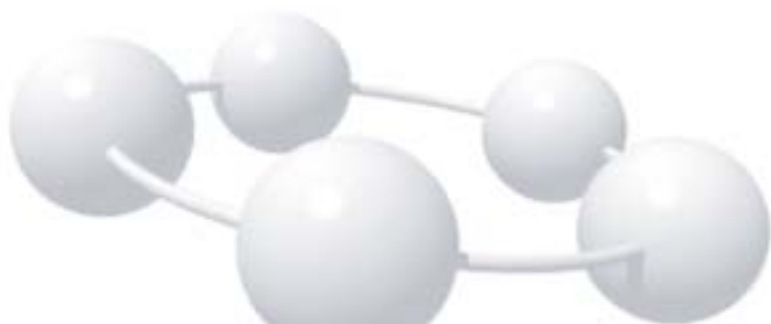
今回のフォーラムでも、寄宿型や通所型、フリースクール、フリースペース、児童館と様々な居場所からの参加がありました。その中身も、自然を基盤においたもの、コミュニティに軸を据えたもの、子どもの参画を目指すもの、遊びを中心に行っているものと多様です。

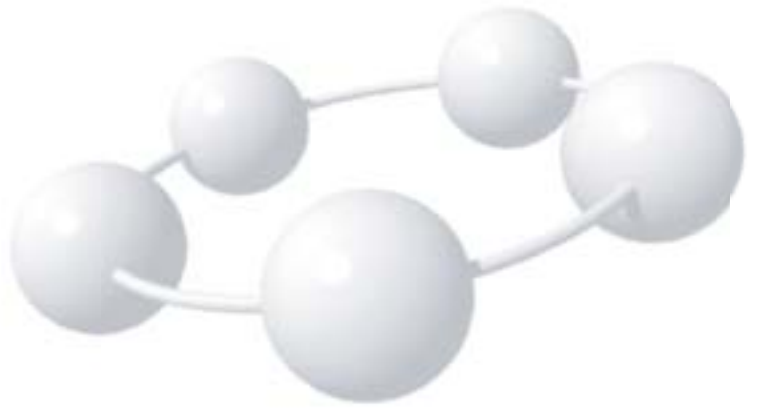
「子どもの居場所」という捉え方は、最初は学校に行っていない子を対象とした活動という捉え方／イメージがあったのかもしれませんが、これからはより広い方向に持っていかなければならないように思われます。国の政策として子どもの居場所が考えられていく中で、私たちはどうしていくべきかを問われているようにも思われます。

子どもの居場所のなさ

例えば、今の里親制度の中では、児童相談所から紹介されるのは深刻な状況の子どもばかりとなっています。里親の登録者も少ないのですが、実際に里親をしている数はもっと少なく、里親は全然足りていません。里親をしているある参加者は、地域で子どもを育てるという発想がないと発言した上で、一時保護された子や、親は生きているけれど親に見つからないように緊張しながら生きている子と実際に暮らしてみると、親から引き離して一緒に暮らさなければならぬという仕組みづくりに立ち遅れが多いと感じています。ただ、現実にはさまざまな虐待を受けていたり、厳しい背景をもって生きている子の中から保護され、里親に引き取られた子どもたちは、それでもまだ、仕組みに乗ったケースだと言えます。

今、いろいろな居場所が出てきています。そこには、当たり前で夜親がいない子、完全にネグレクト状態で暮らしている子などが出入りしていることがままあります。





寝屋子～伝統型の居場所

三重県鳥羽市の答志島に「寝屋子」という若衆宿がまだ続いています。寝屋子では、5歳までの子は神の子、6歳になると村の子とって、村の子になったら村全員で子どもを育てるという思想があります。子どもの居場所とは、この若衆宿のような場所ではないかという意見がありました。

ある年齢に達したら、複数の男子が仮親のもとで一定期間を過ごすという制度は、かつては全国にあったことで、寝屋親（仮親）には、本当の親には相談できないことも相談できるような斜めの関係がとれる。昔は毎日一緒に過ごしていたけれど、今は子どもが結婚するまでの間週末だけ寝屋親のところまで過ごします。とても愛情を持って育てられ、寝屋親が漁などで大変になると、子どもたちは命がけで助けるのです。寝屋子では、各世

代がかけがえのない存在としてライフサイクルを作っているのです。

居場所が公的支援を受けたり行政を動かしたりしながら、どうやってスタッフの世代継承をしていくのかは、気になる点です。なぜ寝屋子は今でも続いているかということ、そのベースに伊勢湾の豊かな資源があって、答志島ではアワビや伊勢海老といった高級な食材が海で取れることがあります。そこで昔ながらの共同漁法を今でも伝えていて、働くということ、生きるということが、そこに完結してあるというのが、寝屋子を持続可能にしていく基盤になっているといえます。

この寝屋子の取組み自体を、そのまま都市部に持っていくのは難しいだろうと思われ。ただ、核家族化や地域が崩れかけているなかで、「地域で子育てを引き受ける／支えあう」という考え方は、今一度考え直してもよい視点ではないかと思います。

子育て支援施策と行政がつくる「居場所」

子育て支援と 行政が行う「居場所」 ～次世代育成推進法～

子育て支援といっても、児童館や学童保育など子育て支援にかかわる組織の自由にはなっておらず、結局は制限があるのが現状との声が聞かれました。

また、行政は、実際には密接に関連している男女共同参画と子育て支援とを切り分けて考えているようだとする意見があります。この問題を考える際には男女共同参画ということと子どもが育つということを並行で考えていく必要があるとの指摘です。

また、子どもに焦点を当てると、子どもにかかわる親への支援という視点も出てきます。親が育つことは子どもが育つことの基盤となるので、子育て支援だけではなく、親が育つことへの支援も必要だと言えるでしょう。最近では、単に親が子どもを育てるための環境を整える「子育て支援」だけではなく、子どもの育ちを保証するための「子育て支援」ということも言われるようになってきました。

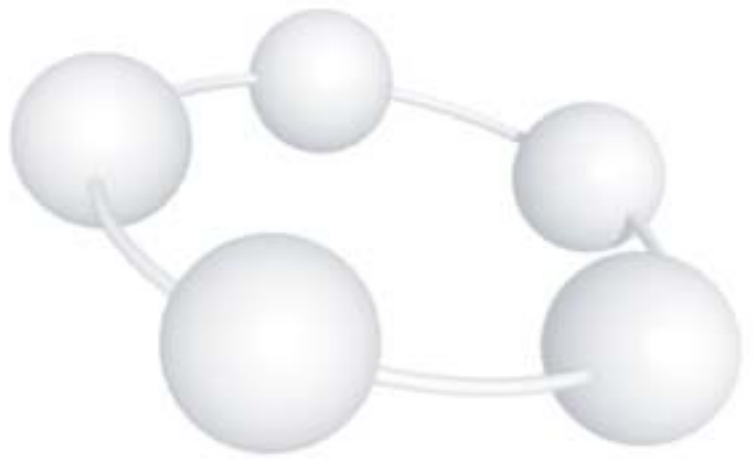
次世代育成推進法などで出てくるよう

な居場所、行政が作り出していこうとしている居場所をどのようなものなのか、これから5年位先を見据えていく必要があるとの意見がだされました。

児童館・学童の廃止と 全児童対策

行政は働くお母さんのための子育て支援については強く言っていますが、本当は「子どもの最善の利益」にたった「子育て支援」の方が大切なのではないかとする意見がありました。居場所は大切という概念は定着しているので今後は居場所が増えることが予想されますが、増えた時にもっと居場所の概念が変わっていく可能性があります。

男女参画の動きの中には「子どもの社会化」という考えがあることはあるのですが、私たちはその中身についてもっと注意して見ていく必要があるように思います。集団育成という考え方からは、子どもの側に比較的立てますが、男女共同参画の場合、働く女性の側に立ったものが多くなることが予想されます。そこをどうしていくかについてはもっと考えるべきだとの意見がだされました。



学童に関する考え

ある学童保育では、土曜になると焚き火をしていました。昼は母子でおやつを焼き、夜は父親が集まり宴会が始まっていた。公的な場所ではできませんが、こういった場は親同士で子育てについて話したりする貴重な場になっていました。

今、学童保育が削減され、全児童対策にとって替われようとする傾向があります。今の学童は空き教室の増加に伴って学校内への設置が広がっていますが、本来は学校だけではなく、児童館を充実させることも検討されてよいのではないかという意見も聞かれました。そもそも学校の中にずっと子どもがいて、まちの中に子どもの姿がないのは寂しい気がします。子どもは子ども同士の世界と共に、大人とのかかわり合いのなかで育っていくことが必要だと思います。児童館には街の人等いろいろな人が出入りしており、子どもの多様な出会いを保障できるような児童館や学童保育の充実が望まれます。その為に、学童は学校の敷地内ではなく、外側に作るべきとの意見も見られました。

ハードだけではなく、ソフト（人）こそ重要

少年犯罪などを背景として、「居場所が必要」ということで文部科学省をはじめ各地方行政府でも施策としての取組みが始っています。

そのなかにあって幾つかの危惧があります。その一つは、「人」への関心がどうも薄いのではないかということです。通常「居場所」というのは、親なり誰かに「行かなくてはいけない」と言われているわけではなく、行かない自由もあります。もちろん、ハード面の建物や部屋、公園等の空間があることはもちろんですが、「どんなまなざしをもった大人がいるか」というソフト（人）の面が非常に大きな要素を持っていることが見逃されがちです。正に「居場所スタッフの専門性」が何たるかということが問われるわけですが、少なくともこの報告書に見られる視点や考え方を取り入れている活動に、子どもや若者が集まってきているのも又事実です。

居場所の出口

居場所の「卒業」後について

居場所によっては、大よその目安として利用できる年齢の上限を定めている場合があります。その上限の年齢になる、ならないにかかわらずどの子どももいつか居場所から「卒業」するのを迎えます。基本的に、居場所に在籍しているだけではいわゆる「学歴」を得ることは出来ません。居場所に在籍したのちの展開・選択肢について、現実問題として答えがみつからず、「これからどうしたらいいのだろう」と悩んで引きこもってしまう子どももいます。

子どもの居場所感

ある居場所の共有ノートに「自分はトンネルの中にいたように真っ暗だったのが、ここに来ることで前が見えるようになってきた。ようやく自分の本当の居場所を見つけることができた。そして自分は満足して卒業することが出来る」と綴った子どもがいます。

また、別の子どもは「自分は将来的には居場所はなくなればいいと思っているんです。あえてそんな場所を作らなくても、家でも、学校でも、地元のどんな場

所であってもその子のありのままにいられる場所が必要」と言ったそうです。

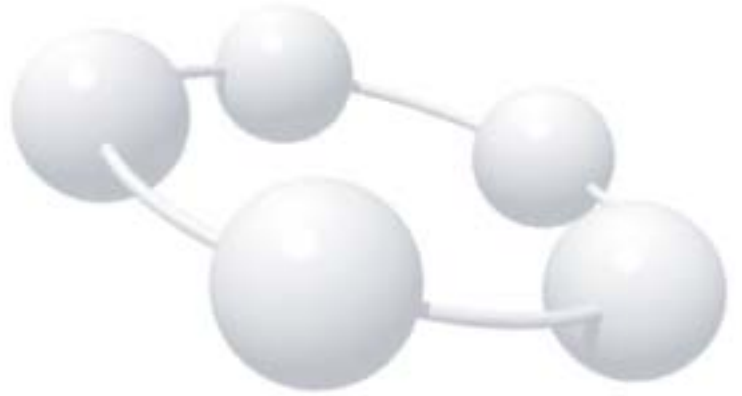
卒業後も続く人間関係

また、居場所そのものからは卒業しても、また帰ってくることもありえます。そういう意味では、ずっと付き合っているともいえるケースもあります。突然電話がかかってきたり、突然訪ねてきたり、最初ははっきり言わないけれど話を聞いていると色々なことがまた出てきたりなど、もちろん形の上では登録制をとっていれば登録が途絶えるとか出口はあるのですが、付き合いという点で言えばずっとつながっているケースもあります。もっとも、「居場所」というものの本質を「人と人との関係」であるとするならば、何かあったら駆け込める／相談できる場所・スタッフがいるということは一人ひとりにとって心強いばかりでなく、地域の豊かさにつながるともいえます。

人生という冒険をするための“何か”を自分のものにできる機会を

結局は、子どもが自分の人生という冒





険をしていける“何か”を自分のものにすることが大切なのだと思います。その“何か”とは、いわゆる知識や技能かもしれませんが、情報や誰かの経験談、自尊心や自信、信頼できる他者との出会いかもしれません。同年代・異年代との出会い、自分自身や他者とのかかわりを見つめなおす機会かもしれません。あるいは、様々な困難に対処していけるような精神的なバランスを以前よりとれることや、カッコ悪い自分や失敗や困難も引き受けていきながら前へ歩いていく心意気なのかもしれません。

全員が全員、自分だけの力で完全に対処できることが必ずしもゴールではないという意見がありました。むしろ、一人で全てを抱え込まず、身近な人同士で互いに助け合い、支えあいながら生きていく。そんな信頼関係やつながりを持っていることのほうがより豊かではないかという考えもあります。そして、最低限、どんなに苦しい時や悲しいときでも「死なない」、或いはそこまでの状況にいたらないようなバランスのととり方、息継ぎの仕方、助けをもとめることが大事なのかもしれません。

居場所ができること

居場所には、次の一步を踏み出すための人生の休息地として、或いは「ガソリン・スタンド」のようにエネルギーを補給するという役割。そして、数学や歴史など、学制的な学びに加え、人間関係や広い意味での社会的な学び・育ちの機会としての踏み台としての役割があるのではないのでしょうか。

現段階では、居場所で過ごしたことを通じて、どんなことを子ども達に伝えていけるのか、どんなモノ・コトを渡すことができるのか。それを具体的にどのような形で実現可能にできるかはまだ明確にはなっていない部分の方が多いのかもしれませんが、しかし、居場所としてできることは、その“何か”が得られるような環境や状況、出会いやそんな雰囲気づくりこそが大切ではないのでしょうか。

子どもたちは、今の自分に必要な“何か”を得られたと自分で感じたとき、自らの意志で次の場所へと旅立っていくのです。一人ひとりの時間軸とやり方で、一人ひとりのゴールへ向けて。

居場所はどこへ行く？

居場所はどこへ行くのか、どうあるべきなのか。今回は明確な答えを出すまでには至らなかったのですが、幾つか見えてきたことがあります。

地元コミュニティが「居場所」になる

地元のコミュニティ（住民）とうまく関係をつくれてきた活動もあれば、やはり「居場所」という活動や取組みについて、その概念や活動自体をうまく伝えきれない、理解されづらい部分もあったと思います。宗教的なものと誤解されたり、子どもが集まってうるさくなるからこないでくれといわれた事例もあります。

しかし、だからこそ地域の大人たちに自分達に取り組んでいる活動やその目的、そして実際何をやっているかということについて、伝えていくことが重要ではないでしょうか。つまり、町内会や商店会等とつながりを持ち、一緒に掃除などの協力をしたり、お祭り等で連携し、更には協力者を募ることが大切だと思います。

もう一つは、地元コミュニティ全体が子ども達にとっての「居場所」になることです。何も、居場所という場があるだけでなく、それを社会の中で子育て・子育ての機会として、あるいは家庭や学校、さらには特定の個人とのつながりが居場所と感じるかもしれません。いずれにせよ、我々が重要視している「居場所観」、あるいはその「エッセンス」がコミュニティ全体に広がっていくことも一つの方向性として出されました。

居場所同士・関係機関のつながりを深める

「居場所」として活動をしているものの、他の活動や団体とつながっていないことがあるように思います。通所型や寄宿型など異なるタイプの居場所同士のつながりはもちろんのこと、環境や地域や不登校等、活動の軸／切り口の違いを活かしてつながり合っていけば、もっと色々なことができるのでは、という意見が出されました。





あるいは、とにかくどこに紹介していいかわからないようなケースは、ネットワークセンターのような総合的な窓口をつくって、そこで相談等の対応することも考えられます。例えば性の悩みでも進学や友人関係の相談でも、あらゆることに応えられるよろず相談窓口というようなもので、子どもたち同士で相談に乗れることもあるだろうし、医療や児童相談所、弁護士等各機関の連携をとりつつ交通整理をするというような提案も出されました。

居場所はどこへ

居場所という活動はとても多様で、良い意味で「あいまいさ」をもち、開かれていたり閉じていたりするのだとする意見がありました。或いは、多様な活動のタイプがあり、切り口があると思います。たとえば、プレイパークで例えると、プレイパークを福祉の場だという人もいれば保育の場だという人もいて、非常に創造的な場所だという人もいます。いろいろな人が様々な切り口をもってきてくれたり、それぞれが色々な側面を感じたりするなかで、そのどれに偏ってしまってもなにか違うものになってしまうのではないかという指摘です。

子どもたちは、元気一杯の子もいれば、

多種多様な悩みや不安を抱えている子もいます。仮に余りエネルギーのない状態であっても、自分の興味関心をもった何かとの出会いが大きな変化を生むこともあります。そういう意味では、人と人との出会い（同世代・異世代）、狭い意味での学制的なものにとらわれない興味関心の探求のできる機会の多さも大切な要素なのかもしれません。

いずれにしても居場所とは？と定義できるものでも、一つの型に収斂していくものでもないのではないのでしょうか。むしろ、「居場所は色々なスタイルがあるんだよ。その中で君はどんなところがいい？」ということ伝えていき、そんな場所が地域のあちこちにあり、つながりをもっていることこそ大事なのではないかと思います。

仮に、はっきりしていることがあるとすれば、それは居場所は建物や部屋等の「ハード面」があれば居場所になるのではなく、そこに「どんなまなざしを持った大人がいるか」あるいは、「子どもと大人、大人と大人の関係性」という「ソフト面」こそが何よりも重要であるということです。

それぞれのスタッフが精魂こめて一人ひとりの子どもと向き合い、言葉に限らずにコミュニケーションし、かわりあい、子どもの今に寄り添う視点が参加者の言葉の節々に感じられました。

トークライブ

このトークライブは、フォーラム当日の分科会のテープお越しを個人名の省略やプライバシーの保護をした以外は未編集のまま掲載したものです。

本文と重なる部分も少なくありませんが、未編集ゆえの意見交換のライブ感をお楽しみください。なお、がお一人の発言です。

居場所のスタッフの専門性

1) 子どもと向きあうことに一生懸命

居場所の方々は、子どもたちのことを知るためにカウンセリングなどを勉強したりすることはありますか？

私たちは特別の手法みたいにして学ぶことはやっていません。個がやることはあるかもしれませんが、居場所として、スタッフの要件にカウンセラーの資格とかも入れていないし、カウンセラーの研修などもやっていません。

その子を一生懸命理解しようとしたら、色々なことを勉強するのは自然なことではないでしょうか？その子と向き合って理解できなかったら、色々な人の話を聞き、LDとか障害の話の聞いたら勉強するし、必要であったらカウンセラーの勉強などもする。あらかじめやっているのではなくて、そういうことでなければやっていけないと思いますが。

たぶん、居場所のスタッフなどがカウンセラーの勉強とかをしてカウンセラーになるような訓練をするということにあんまり意味がないような気がします。今あるカウンセラーの理論を学んで、カウンセラーのようになっていくのなら、そういう人は外にたくさんいるわけです。子どもと向かい合うということを生懸命やっていると色々伝わってくるものがあるわけです。その中から色々なことを感じとって行くわけです。学校と違って楽なのは、担任制みたいになっていないことだと思います。子どももスタッフもそれぞれ相性があるから、それぞれ向かい合っていて、それぞれの関係のなかで気付いていくということがあります。

2) 自分の問題に気づく

他人の目で、色々な人の目で見ると、ということは大変だと思います。

私たちはどういう専門性を身につけるのかということ、一番大事なことは自分の問題に気付くことだと思います。相手がどういうことを出

したときに、自分が怒りを感じたり、どきどきしたりするか、という自分の問題に気付くことに対する研修には力を入れます。例えば、リストカットの子がいた場合、その場面に遭遇したスタッフが泣いたり騒いだりすると、その子はあのスタッフを独占したいときはまたリストカットをします。人を殴ったり壁を殴ったりというときに、その時のスタッフの対応によっては、そのスタッフを独占したいときにまた同じことをします。つまり、相手の問題をスタッフ側が誘発したりすることがあります。スタッフの専門性というのは自分の問題というか、そこに関わっている私は一体どうなのか、というところにあるのだと思います。

今話を聞いて、自己清算していくことなのかなと思いました。自分の揺れなどの違和感を大事にしていくとか、分からない場合は調べていくとか。

3) 客体化せずに関わる - 飲み込まれることも含めて支え支えられる -

医者とか心理とかは子どもたちを客体化してきます。そこに相対している自分というものは関わらせないのです。でも、私たちは違う。子どもと同じ目線の高さで関わってしまう。そこがとても違うと思います。それが私たちのパワーではないでしょうか。

それで飲み込まれたとしても、結果的に何かを肯定しているということですよ。何が良くて何が悪いかということとはわからないのですが、明らかにスタッフが飲み込まれているなどというのは見えているけれども、でも、その時は危うくても、その時にがつり関わったことで、なにかしら違う力が生まれたりもします。リスクを少なくするために、自分のくせに気付こうとは思いますが、もしかしたら、飲み込まれることも含めて、支え支えられるということがあるのかもしれない。

本は一つの体系になっている場合が多いですよ。しかし、子どもと自分との関係でいくと、色々な行き方がある、その場その場で状況を感じつつ動いていくしかないのではな

いでしょうか。それは本と違って、体系どおりにはいきません。たぶん、一つの体系に当てはめてやっていくという考え方だとあんまりうまくいかないのではないかと思います。

4) 自分の存在に根差した、鍛えられた主観

居場所の専門性というものと医療モデルの専門性というものはどう違うのかということですが、居場所の専門性を支えているのは、自分の存在に根差した、鍛えられた主観だと思えます。この、鍛えられた主観というのはエリクソンという人が言った言葉で、ディスシブリンド・サブジェクティビティ (disciplined subjectivity)。つまり、そういった鍛えられた主観をもって僕は生きていて、それが主観的な人間観で、科学的な客観性というのは、そのごく一部にすぎないのです。科学的な客観性というのは、なんでも物質化するし数値化します。それに根差したのが科学的人間観です。それに基づいて作られるのは医療モデルやカウンセリングモデルや教育モデルだと思えます。

5) 力関係に敏感でないといけない

私たちは、力関係に敏感でないといけませんね。それはとても必要な感覚だと思えます。専門家と子どもも力関係だけれど、私たちと子どもも力関係で、それに敏感であれば、引き際ということも分かるし、状況によっては負けなければいけない必要もある、向こうが5だったらこっちは1にしなくてはいけないとか、そういう具体的な日常の中の組立てにつながっていくと思えます。想像以上に子どもって大人に言えない、言えていないと思えます。

多数派の枠に合わない子どもたちが、ラベリングされ専門家の対象領域に入れられてしまう

いわゆる「専門家」といわれる人達の領域が増えています。心理学者の小沢牧子さんが最近出した本に『「心の専門家」はいらない』(洋泉社)というものが、結構反響があった本です。子どものことでも、色々な名前をつけられたり、専門家が発言することによって、親や居場所のスタッフなどが動きにくくなっています。当事者も与えられた名前に縛られています。そういうことがすごく増えています。居場所やフリースクールに来る子どもたちが、医療とかカウンセリングルームから回ってくるということがこの数年急増してきているということがあります。

多数派の枠に合わない子どもたちが、何か特殊な名前を付けられて、専門家の領域に入れられるというふうに分けられていってしまうということが、おそらくこのフリースク

ルでも起きている事だと思えます。

「不登校」という診断名で薬が出される

ある若者は、精神病院に入院させられたことがあります。その彼は病院に入ったことに納得がいていません。最近、そういったことが増えていると感じ、子どもと親に対してアンケートをやりました。そうしたら、「不登校」という診断名で薬を出されている子がたくさんいました。色々な薬があり、抗精神剤が出てしまうこともあります。不登校は病気ではないわけですが、それが病名になって薬が出てしまうのです。それで大変なのは、副作用が結構あることです。不安を持ったりして、それが辛いといっている子どもたちが結構出てきたのです。

薬の濫用 - 薬を飲むのは誰のため？

薬を飲まされている子は結構多いですよ。アメリカとかではそれほど副作用は少ないと言われていたようですが、石川憲彦さんらは薬の害は覚醒剤とかに近いと言っています。リタリンなどは学校に行っているときだけ飲まされています。他のときは飲ませないのに、学校で暴れると、他の子の中で浮いてしまったり、いじめの対象になったりするので、だったら飲ませたほうが、みんなが幸せだ、という論理なんです。その子が根本的に治っていくとか、変わっていくという発想ではありません。対症療法で、暴れたりしないために、他の子とうまくやっていくために飲みませいということなんですね。

ですからLD等のばあい、一般の親から「何で薬飲ませないのかしら。親が努力して」と言われたりします。

【リタリン】塩酸メチルフェニデート製剤の商品名。向精神薬の一つで、中枢神経系を興奮させる作用があり、ナルコレプシーや注意欠陥多動障害 (ADHD) などの治療に用いられる。(三省堂「デイリー 新語辞典」)

ラベリングに苦しむ子どもたち

子ども自身も病名や診断名を付けられていることで傷付いています。ある子どもはアスペルガー - だと診断されて、自分はアスペルガー - だから他の人より劣っていると思ってしまって、「自分がアスペルガー - だと他の子にばれてしまうと白い目で見られて、仲間にももらえないから絶対言うな」とスタッフに言ってくるのです。しかし、そのことを言わなければ、他の子たちがその子が「アスペルガー - だと診断されていることなど全然わからないのです。つまり、その子が非常に変わってい

るわけではなくて、大好きなことだと興奮するということは大体どの子にもあったりします。でも、その子はアスペルガーだとお医者さんに言われて、自分は普通でないと思っ
ているわけです。そういう子どもとどう付き合うのかということもあると思います。

医療に答えをもとめる親の動き

今の親の動きかたというのは「教育」を求めるのではなく、その子になにか原因があるのではないかと考え、その原因を知るために病院に行っています。だから、今までは教育の中だけで完結していた中に、医療とかスクールカウンセラーとかが入ってきて、それが教育とどうせめぎあいをするかというのが問題でした。しかし、今はそこどころの境界が取り払われてしまって、基本的に教育の中ではなくて、教育に対して親はもうお手上げになってしまっています。そういう人達が医療のほうにどっと動き出しているのではないかなと思います。

医療モデルと生活モデルに関しては、親が医療モデルを求めていかざるをえないような中に生きているということはあるよね。

親が自分の子育てが間違っているのではないかと思ったときに、障害や病気だったということになれば、私のせいではない、と思えることはあるでしょう。医療モデルの中に落とさないと私が責めを負わなくてはいけない、という夫婦関係や社会や世間の目がありますね。

「(心の)専門家」の介入によって、親が自分の頭と感性で子どもを理解しようとするをやめてしまう

お医者さんやカウンセラーなどのいわゆる専門家と言われる人に、「あなたのお子さんはこういう病気ですから、これこれこういう薬をちゃんと飲んでください」と言われると、「ああそうなんですか」というふうになって、子どもも親も、ああ病気ののだ、と整理してしまいます。そうすると親が子どもを理解しようとするのがストップしてしまいます。そういうことがすごく起きています。

それでも、どうして親は先生の出した薬をそのまま飲ませようとするのかというと、専門家だからという信頼があるからです。本来だったら、自分の子どもが今どういう状況なのか、なぜ子どもが辛いのかを知ろうとしていれば、色々なことが見えてくるかもしれないですね。でも、お医者さんが、これはこういう病気だからこういう薬を飲めばいいですよ、と言った途端に、線を引いて、そこを理解しようとしなくなってしまいます。その結

果として子どもが苦しくなるという状況が、結構多かったです。そのようなことは、これからもどんどん増えていくと思います。もちろん、医療が全部悪いとかそういう単純な話をしているわけではありません。必要な連携をとることは、もちろんありだと思います。ですが、その必要が、誰にとつての必要なのか、ということがはっきりしないままに医療の中に入れられることがかなり広がっています。

主体としての子ども・親 - 専門家の言うことを丸のみにしない -

子どもの自主性や主体性を尊重したいにもかかわらず、いわゆる専門家に対して子どもが言いたいことを言えなくなってしまうことが、色々な形でよく見えます。そういう規制みたいなものがあります。そういうところに構っていくことは大事だと思います。

気付きというのは、なんでこんなに自分は苦しいのか、子どもたち自身が気付いたり、自分たちのコーディネーターであったりサポートをしてくれている大人が、実は圧力を与えているということ、子どももその人も確認するということです。でも、それがあつたとしてもなかなか実際には変わっていきません。

専門家がいたら、利用しなくてはいけないと思うんです。その中で大事なことは専門家の言うことを丸のみにしないで、自分の姿勢で受け止めていくことだと思います。私たちがしなければいけないことは、親と子がそういうことが出来るように、支えることだと思います。専門家を紹介して、行くかどうかは親が決めることだし、おかしいと気付いたことを伝えることなどは、全然投げることはないです。ただ、誰が言うことも丸のみにすることはできないということを親にも子にも伝えていかななくてはいけないと思います。

ラベルを外す

ラベルを外すのも、別の専門家の権威によって外しているという構造があります。でも、石川憲彦さんという、僕らにとっては心強い精神科医がいることは大きいと思います。「だって石川先生はこう言っているよ」とか、「別の医者はこう言っているんだよ」と言うことで、医者
の権威性に反証していくところがあります。

昼夜逆転をふくろう症と名付けた人がいます。その人にふくろう症と名付けられて、薬を飲んで
いた男の子は来てしばらくしたら、だんだん、薬を飲まなくても大丈夫になっていきました。そして最終的には薬を飲まなくなりました。そういうのは、意味がすごくあるな

と思います。医者に言われて、処方された薬を飲むことで何とかなっているのかと思ってはいるわけです。でも、本当は薬を飲まなくてもなんとかなると分かってくると、飲むことに違和感が出てきて、飲まなくなったら体調がむしろ良くなったりしました。それまではすごく体調を壊したりもしていましたが、そういうこともなくなっていきました。そういうことも彼はすごくおかしいと思いましたが、人に話すのですが、話すことによって「自分もそうなのかもしれない」と他の子たちも少し楽になっていくことがあります。

子ども自身が納得できる医療を

不登校の子の中でも医療を必要とする子はいます。80年代とかに不登校は病気じゃないということを書いたときに、病気の子はどうするんだという論争がありました。ですが、別に病気の子もいるわけです。あきらかに医療とつながったほうがいいケースもあります。だから、どういうふうに我々も自分の視点で見れるようにしていくのかということがあると思います。

今のケースで大事なものは、その子がどういう診断名を付けられて、それからどういう治療を受けていて、その子がそれをどう受け止めていくのかということではないでしょうか。

納得がいかなかった医療に例え結果的に救われたとしても、その子は決して納得できないだろうし、その子が納得できる状態やどう選択をしていくかを考えているところをサポートしていくことが私たちの役割だと思います。それは子どもの参画だとも思います。病気の診断名を調べたり、薬について調べたり、そういうことをしながら社会に対する力を身に付けていくということではないでしょうか。

「医療モデル」に対抗する「生活モデル」からの問い返し

「医学モデル」で子どもたちを見ようとする動きがある一方、私たちは生活という力で子どもたちを元気にしてくださいと言います。その対立という構図が一つあります。「医学モデル」、「生活モデル」という言い方はありますがそれは看護の世界で大きな話題になっています。昔のように単に病原菌が身体に入り、感染症を起こすという直の時代と違って、生活の様々な要因の一つが症状を作り出している時に、感染症の見方と同じように原因を一つだとして薬でそれを押さえたいこうとするやり方に対する反感というのが、私たちの世界の中にはあります。結局ピアカウンセリングやサポートというのは、そういう専門性に対するアンチ専門性というところから来ていると思います。そういう体験の中から、

医者たちの声を打ち破っていく、私たちの私たちへのサポート、その人達の声を大きく社会に介入させていくことが、目の前の居場所活動ともう一つしていかなければいけないところだと思います。

専門家に声を届ける

弁護士とか医者とかいわゆる専門家がいますが、その人達の中に私たちの言葉に耳を傾ける人はたぶん、ゼロかごく少数なのではないでしょうか。医者や弁護士に変わってもらえるように積極的に働きかけないと駄目だと思います。彼等が変わってくれるのを待っているだけでは、凄く時間がかかるか、変わらないかということだと思います。声を届けていかないと、もう待てない状況だという気がします。

様々なつながりの中から新しい居場所を模索

社会の中のリソースを、使い切れていないものを、既存のものでも使っていくということがやり残していることのような気がしています。いま一方でそういう方向で行くということも始めてもいいと思います。一方で、居場所のすぐ近くでやれることというのは、もっと多様に、総合的な窓口を一ヶ所に作ってしまうのはどうでしょうか。そこにきたら、そこで、この手の問題はここ、この手の問題はここというような振りわけができますよね。普通だったら僕らが迷うわけですよね。これは弁護士のところに持っていったらいいのか、どこどこに相談にいったらいいのか、児童相談所にいったらいいのか。そんなこともわからないけれども、もっと小さなことでも、例えば性の悩みでも買物の相談でも、全部ひっくるめてよろず相談ができるといいと思います。その、よろず相談があるところで、子どもたち同士が相談に乗れることもあるでしょう。そういう中から、医療への繋ぎ方もあるけれども、こういったこともあるよというように、層が厚くなって、伝えられるようになったら、子どもにとっての最善の利益をもたらす情報が、ここしかないかと思ってたところが、こんなにあるのかというふうに幅が出てくるのかなと思います。僕らが孤立してつながれないことが沢山あるように思います。

居場所同士も居場所以外はあんまりつながっていないというのもあるから、それがつながり合わさっていけば、もっと色々なことが出来るはずだと思います



分科会・キーワード一覧

セッション3・グループ1

お母さん達が投げやり。専門家を求めている。
例) 医者も居場所も

専門家を前にすると子どもは言えなくなってしまう。
子どもの為と言いながら圧力にも。

子どもを感じる力関係に敏感にならなくてはいけない。

通所型の居場所と寄宿型の居場所。そこにヒントが？

ここに集まっているのは居場所の専門家？

居場所スタッフにはカウンセラー研修が必須か？
子どもに向き合って何とかしようとして学ぶ、の積み重ね

専門家は利用する。それを丸呑みにせず、親と子が一緒に向かう。それが出来るためには？

「子どもの問題」への知識や判断を持っていても言わない。(で親と子にゆだねる)それが専門性！

自分をセンサーにすること。始めから心理学に頼らない。

子どもが納得しながらいろんなことに向き合えるようサポートする。居場所スタッフの役割。子どもの参画。

存在論的人間観(鍛えられた主観)と科学的人間観(モノ化する客観)。

子どもを客体化しない専門家。それが居場所(医者・心理)。飲み込まれること。引き受けて支え支えられる。

医療モデルに対抗する「生活モデル」からの問い返し。

子どもに対する多様な視点を共有する。自分の性向・クセに気づくこと。「スタッフ研修」のポイント。

「だいじょうぶだよ」というメッセージが子どもたちには届ききらない。守りきれないときの切なさ。

子どもの声を聞いてくれる医者や弁護士(専門家)を探し出す。当事者の声を専門家に伝える努力を。

居場所を「うまく使う」たくましさを子どもたちは持っている。

居場所の中に専門家を取り込む。専門機関の形を変えてしまう? 居場所の概念変化?

活用されていない社会のリソース。もっともっと活用できる仕組みを居場所が創れる?!

居場所の専門性・対象をもっと幅広く考えて。
例) 学校の中で苦しい子。フリースクール&フリースペース以外の人の受け止めは?

セッション4・グループ1 パート

自立のスタイル(居場所のスタイル)いろいろ
例) インド人の国際的ネットワーク家族/日本の20・30代ギャップ
大人がまず考えの幅を広げること

「助けて」という力/「やってみたい」という力
子どもが自分で持っている力への気づき・エンパワーを大切に

大切にしたいこと
クリエイティブに生きる/人間は新しいものを創りだす動物

生きる手がかりとして大切
具体的に作り出す技術・技能を持つこと
それが居場所の柱を作り出す面も?

居場所はひとつのスタイルである必要ない
行政の居場所はひとつの型を押し付けてくる

子どもの選択肢ない地域も多い
情報としてのネットワーク重要
人や取り組みのそれぞれに力を得た

今回の収穫
ネットワークができたこと
各地のノウハウ・考えを知れた

現場は違っても子どもに寄り添う視点が共有できた。

次世代育成推進法
行政が使う「居場所」?
からめ取られる危険/ 逆手にとって

居場所にくるネグレクトされた子
HP友達のつながりで
居場所では、普通に在る。

居場所の出口
大人・子どもが一緒になって新しい生き方のスタイルを作る
例) 持続可能なパン屋

「居場所の生活」の背景・出口としてある「仕事の協同の場」?
例) 三重県・寝屋子

持続可能な居場所？
 代表者（カオ）が退いても続く
 行政（公共の仕組み）を変えて社会化する？

居場所卒業
 人生のチャンスを見つけて飛び出していく
 スタッフに支えられる子ども スタッフを支える
 子どもへ

子どもが何かをつかんで出て行く
 スタッフ：その瞬間（転換点）を感じられる
 子ども：どこにでも居場所を見つけられる

卒業しても続くつながり
 一生付き合いが続く？
 フラットな関係性・支えたり支えられたり

居場所の時間を切り捨てていく（無駄な時間？）
 ブツ切りにして時間を埋めていくことに無自覚な
 親

同世代だけでなく世代間（時間をつないで）の付き
 合いを
 居場所感を高める

居場所の卒業後？というより出口
 働く / 社会へ出る / 学校へ？

男女共同参画（子育て支援）と学童保育とのかかわ
 り
 同時に「親の居場所づくり」も

子育て支援というパイを行政が切り分けて考えてい
 る
 自分たちで創る場に
 子ども・母親・父親が出入り グループ作り

スペース（拠点）からエリア（地域）へ
 どういう地域を目指すのかが居場所の将来像？

子どもをキーワードに街の居場所を創っていく

各世代のライフサイクルが出会う場所
 世代継承
 持続可能な仕組み作り（コミュニティ）

若者の起業指向
 居場所の面だけでなく社会との新しい関わり方の
 模索では

セッション4・グループ1 パート

保全育成・社会教育の価値観 / 居場所の価値観
 くぐることで深くなる
 改めてつなげる努力

居場所の専門性
 「中へ入りこみすぎの暴力」につながらないか心配

現場はそれぞれ違うけど共通して求められているも
 のは？

有償ボランティア
 社協ボランティア保険対象となる組み立て
 「援助者」ではない

居場所のスタッフ
 ユースワーカー？ / 有償ボランティア？

若者たちのコミュニケーションが浅くなっている
 場が狭くなっているのではなく、場にできる力が弱ま
 っている。

若者たちの「カフェ起業ブーム」
 それって居場所作り？

「居場所卒業」
 居場所に依存しない人を育てる

並行して進んでいる「男女共同参画」とのからみ
 子育ての社会化（女性の立場）

子育て支援
 働いているお母さんへの支援も
 むしろ子どもへの最善の支援

「次世代育成推進法」
 これからは子育て支援も枠を広げて居場所を考え
 る？

学校に居にくい子どもだけを受け入れるのが児童館
 ではない！
 「都合のいい託児所」ではない

学校の中と外でちがう自分を使い分ける子どもたち
 学校の中に話せる人がいない子どもは多い。

× 空き教室利用の発想
 「街の中を子どもが走り回る風景づくり」ための拠
 点が児童館

大人も複数、子どもも複数
 それを継続する場 / 場を続けることは文化
 児童館・学童

大人が導くワークショップの功罪？
 コミュニケーション深めるきっかけ
 大人の分を超えた関わりは裏切りにも

対立の投げかけ
 課題（葛藤をおこすタネ）をふる
 例）「この木を切るか？」みたいな

対立から学ぶプロセス
 大人は居るけれど言わない
 時間をかけて子ども同士調整・大人も介入
 パイオニア・キャンプ

くりこま耕英寮
 生活をともにする場
 校長は親がわり / 自然の中で発散 / 対立から
 学びを引き出す（PA）

三重県「寝屋子」の伝統と改新
 「新しい若者宿」を試み「寝屋親（仮親）」

会津若松では民間の居場所・学童保育・地域の人々
 との連携の形を考え始めている

「地域で子どもを育てる文化」をどう考えるか
 例）水沢市寺子屋の伝統
 品川区児童館
 学校利用の新施策？

居場所のあり方いろいろ
 寄宿型・毎日型・月1回型
 共通で困っていること
 共通のノウハウって？

ノウハウをネットワークする
 「隠している場合じゃない」 by 川嶋直（JEEF）

参加者アンケート

到着したときに何も考えていなかった自分が、今自分の活動を振り返り、これからの自分の課題や今後やってみたいことまで考えられるようになっていました。参加者の一人ひとりが持つ経験の豊かさ、視点の異なりが自分を満足させてくれました。

居場所とは？と定義するのではなく、様々な活動の方法があり、それぞれのよさがあることがみんなで話し合うことで見えてきたことがよかった。参加者が、居場所づくりの経験のある人や課題を認識している人たちばかりだったので、すんなり共通の話題で話し合えてよかった。

こんなに多くの居場所に関わる方々とお話ができる機会はあまり無いので、とてもいい経験になりました。聞いて楽になったこと、課題として残ったこと、これから生かしていきたいと思います。居場所に関わっていると、視点が内面に向きがちですが、こういう機会があると第3者的意見も聞けてとても良かったです。

居場所 = 不登校をしている子どもたちが集まるスペースというイメージがあって、言葉の居心地が悪かったけれど、いろいろな居場所の考え方があり、そこにいる人が思う・願うことがいろいろな居場所をつくっているのだなぁと想い、居場所のイメージが広がった。

居場所の在り方が「不登校」の一つではなく、多様だったために、社会（コミュニティー）という視点で居場所を再確認できた。その一方で、問題を明確に提示し、グループの選択の幅を増やすと良いと思う。私のいたグループでは浅い話し合いで終わってしまったので、もっと問題を深くまで話し合えるグルーピングが必要！

「居場所」といっても、分野はいろいろで、必ずしもすべてに想像力を働かせることが出来たわけではなかった。分野別、テーマ別の分科会があってもよかったかもしれない。

第1回目としては、かなり高いレベルで議論ができてよかった。しかし、来年やるとしたらどういうテーマにするか難しいかもしれませんね。小さなNPO活動から、行政のものまでが集まり、お互いに勇気付け、支えあえるつながりがより深まるテーマであれば、と思います。

実行委員会の取組み・共催団体紹介

実行委員会の活動記録

- 2003年
- 3月26日： 第1回・顔合わせと趣旨の共有
 - 4月24日： 第2回・会場、時期、本番の会議形式他
 - 5月20日： 第3回・本番の会議形式他、事業名他
 - 6月23日： 第4回・チラシ・広報の検討他
 - 7月15日： 第5回・参加者の事前アンケート検討他
 - 8月26日： 第6回・当日の運営
 - 9月 8日： 第7回・当日の運営に関する再確認
 - 10月24日： 第8回・報告書の構成の検討
 - 11月18日： 第9回・報告書の内容についての検討
 - 12月18日： 第10回・報告書の内容についての検討

（特活）青少年育成支援フォーラム（JIYD）とは？

～子ども達をもっと元気に輝くために、子どもと関わる大人を元気にする！～

私たちの団体は、子ども・青年（以下子ども達）が、以下にあげる5つの「財産」をもって成長していくことを目指しています。

無条件に受け入れる大人が一人でもいる、 眠り、遊び、学び、「居る」ことのできる安全で安心できる場所、 心身ともに健康な生活習慣、 人のためになることをする機会、 社会人として自立できる技能、知識、 価値観を身につける機会。

しかし、日々の活動のなかで直接子ども達と接することはありません。直接的に子ども達とかかわりをもっているNPOを始めとする様々な団体やスタッフを支援する、いわゆる中間支援 インターメディアリー で、支援領域を青少年分野に限定しています。

現在の具体的な活動は、以下の4つです。

企業等と協働した資金助成事業

NPOの運営技術支援事業

実践者同士の経験の共有や相互学びあいフォーラム事業

ライフスキル・プログラムの普及事業

（詳しくはWebsite <www.JIYD.org>をご覧ください。）



居場所交流全国フォーラム2003
- for Youth Alliance -
事業報告書

編集 フォーラム2003 実行委員会
(特活)青少年育成支援フォーラム(JIYD)

実行委員会

工藤 博之 (東京都中野区かみさぎ児童館)
嵯峨 創平 ((特活)環境文化のための対話研究所)
嶋村 仁志 (冒険遊び場・プレイリーダー)
西野 博之 ((特活)フリースペースたまりば)
萩原 建次郎 (駒澤大学文学部講師)
福田 房枝 ((特活)日本子どもNPOセンター)
(特活)子ども劇場全国センター)

インターン 櫻井 宏美 (慶應義塾大学 大学院)

発行所 (特活)青少年育成支援フォーラム(JIYD)
〒108-0074 東京都港区高輪4-10-63-202
TEL. 03-3440-3373
FAX. 03-3440-4447
E-mail info@JIYD.org
URL. <http://www.JIYD.org>

発行日 2004年1月15日



JIYD